

山梨県北杜市明野町上神取
諏訪原遺跡発掘調査概報
2011年度



2011.12

昭和女子大学人間文化学部
歴史文化学科

例　　言

- 本書は、山梨県北杜市町上神取1558-1に所在する諏訪原遺跡の2011年度発掘調査概報である。
- 発掘調査は、2011年8月2日から13日まで実施した。
- 発掘調査は昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科が主体となり、山梨県教育委員会・北杜市教育委員会の指導のもと、昭和女子大学大学院修了生・大学院生・学部学生が参加し実施された。
- 発掘調査は、昭和女子大学人間文化学部生活機構研究科教授 山本輝久・同人間文化学部歴史文化学科准教授 小泉玲子が担当した。
- 発掘調査は、独立行政法人日本学術振興会平成23年度科学研究費（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）研究課題名「関東・中部地方における繩文時代中期大規模集落崩壊過程をめぐる研究」の補助金（研究代表者 山本輝久）、および、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科2011年度プロジェクト予算「山梨県北杜市諏訪原遺跡の発掘調査を通じた体験型実習の実践」により実施された。
- 2007年度より実施してきた調査対象地区的発掘調査は、本年度の調査をもって終了した。
- 発掘調査により発見された遺物は、現在、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科において保管中であるが、正式な発掘調査報告書が刊行されたあと、北杜市教育委員会に返還する予定である。
- 本調査概報は、調査参加学生の協力を得て出土品整理および実測図面の整理・トレースを行い、山本輝久および大学院修了生・大学院生の原稿にもとづき、小泉玲子と山本輝久がとりまとめた。
- 発掘調査にあたっては、山梨県教育委員会、北杜市教育委員会のご協力をえたほか、下記の方々からご指導いただいた。あつく感謝したい。
佐野 隆（北杜市教育委員会）、菅谷通保、大綱信良（早稲田大学人間文化学部）、下島綾美、植月 学（山梨県立博物館）、横月未来、鶴家玲美（昭和女子大学人間文化学部生活機構研究科博士課程・相模原市教育委員会）、脇 幸生（かながわ考古学財団）、脇 美沙（相模原市教育委員会）、江川真澄（相模原市教育委員会）、阿部昭典（國學院大學伝統文化リサーチセンター）、早勢加菜（アム・プロモーション）、岩井良栄、結城 晶子・大森咲子（昭和女子大学OG）、中泉雄太（駒澤大学大学院）

目　　次

1. 調査経緯	1
2. 遺跡の位置	2
3. 調査経過	3
4. 発見遺構と遺物	5
5. まとめ	17

挿図目次

図1 遺跡の位置	2
図2 調査地区全体図	4
図3 SWU-PJ1号住 半断面図	6
図4 SWU-PJ1号住 炉址 平断面図	7
図5 SWU-PJ1号住 埋甕 平断面図	8
図6 SWU-PJ2号住 右圓炉址 平断面図	9
図7 SWU-PJ2号住 半断面図	10
図8 SWU-PJ3号住 石圓炉址 平断面図	12
図9 SWU-PJ3号住 平断面図	13
図10 山上遺物	16

1. 調査 経緯

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科は、2007（平成19）年度より、山梨県北杜市明野町上神取に所在する縄文時代中期の集落址である諫訪原遺跡の学術調査を実施してきた。これまでの4次にわたる調査の結果、縄文時代中期の堅穴住居址3軒、土坑、中世末から近世期と思われる道路状遺構等が確認され、多大な成果をあげることができた。その年度ごとの調査結果の概要については、別にそれぞれ報告済み（昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科報 2007・2008・2009・2010）である。

昨年度の調査では、SWU-PJ3号住の柱穴調査が半蔵段階で終わったことや、石圓が址の内部調査も未着手のままで終わったことから、2011年度も継続調査を実施することとした。しかし、本年に入って、これまで調査を実施してきた地区を含めて、大規模な範囲に土地改良工事が計画されることになり、それに伴い、平成23年度より北杜市教育委員会による事前の記録保存調査が実施されることとなった。その結果、設定した調査地区南側のA～C～8～12グリッド（図2参照）は、北杜市教育委員会が調査を実施することになった。このような経緯から、これまでの調査対象地区は、今年度が最終年度の調査となることになった。

調査の対象地は、諫訪原遺跡が所在する上神取集落内の上神取1558-1番地（土地所有者 村田勝海）の約700m²である。この調査対象地は、かつては養蚕のための桑畠であったが、現在は桑栽培は放棄され、2007年の調査開始前は雑草地となっていた。

調査にあたっては、本年度は、独立行政法人日本学術振興会平成23年度科学研究費（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）研究課題名「関東・中部地方における縄文時代中期大規模環状集落崩壊過程をめぐる研究」の補助金、および昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科2011年度プロジェクト予算「山梨県北杜市諫訪原遺跡の発掘調査を通じた体験型実習の実践」により実施することになった。科学研究費補助金代表研究者である山本輝久が調査全期間を科学研究費により統括しつつ、調査期間約2週間を前半と後半に分けて、前半は科学研究費補助金による調査を実施し、後半はプロジェクト予算により実施することとした。

今年度の調査は、夏季休暇期間を利用して、8月1日～14日の予定で調査を実施することになった。参加学生は、本年度から大学院・学部3・4年の考古学ゼミ生に加えて、1・2年生を対象として、5月当初に参加希望者を募り、応募のあった学生から選抜して参加させることとした。このような経緯を経て、土地所有者である村田勝海氏の承諾を得て、北杜市教育委員会の指導のもと、発掘調査に至ったものである。



写真1 遺跡遠景 塩川右岸から



写真2 発掘再開前の現況 2011.8.4

2. 遺跡の位置

遺跡は、山梨県の北方に位置し、山梨県北杜市明野町(旧・北巨摩郡明野村)上神取1558-1番地に所在する(図1)。標高約550m、塩川左岸の河岸段丘面に広がる遺跡で、東側には標高1700mを越す茅ヶ岳・金ヶ岳の雄大な山麓が広がり、北西には八ヶ岳山麓、南西方向には、南アルプスの山々が望まれる風光明媚な場所に位置している。これまでの調査結果によると、「茅ヶ岳山麓でも最大級の規模を誇る」とされ、「遺跡の広がりは2万m²以上におよび、100軒を優に超える住居址が埋蔵されていると考えられる」(佐野 1996)、縄文時代中期の大規模な拠点的環状集落址である。

養蚕業不振により桑の栽培が放棄され、それに変わって、畑地への転化や宅地化が進みつつあり、そうした状況の中、桑の抜根による道筋破壊に対処することを目的として、明野村教育委員会により、1992(平成4)年から2003(平成15)年にかけて8次にわたる発掘調査が断続的に行われてきた(佐野 1996・2003・04)。

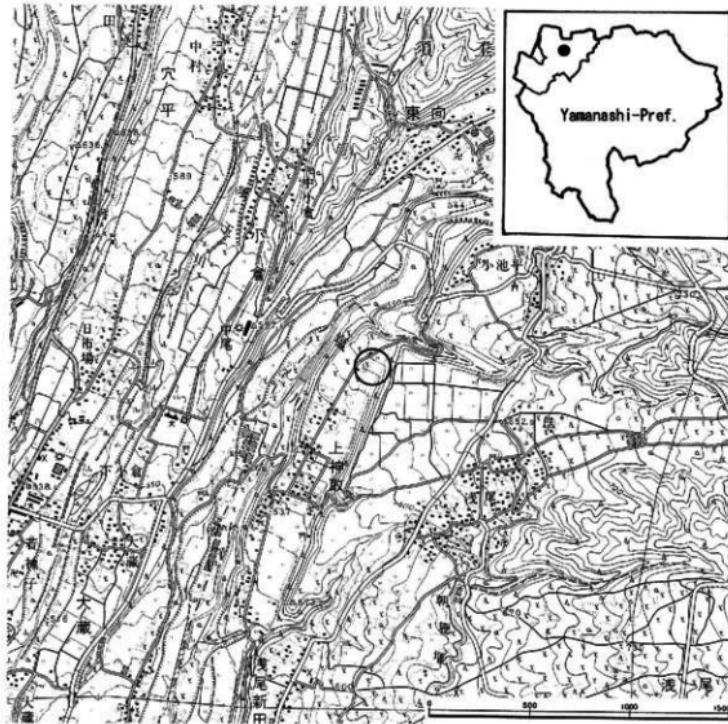


図 1 遺跡の位置 1/25,000

3. 調査経過

調査はまず、昨年度の調査の埋め戻し土の除去から開始した。今年度の調査が最後となるため、埋め戻しに用いた土嚢を調査区からすべて除去し、土嚢袋から土砂を排出する作業を行った。その後、調査区を清掃し、検出されている3軒の堅穴住居址の完掘を目指して、SWU-PJ1号住の北側のC・D-5グリッドに東西7m×南北1.5m、東側のD-6グリッドに南北5m×東西1.5mの拡張区、SWU-PJ2号住の北側、A-C-5グリッドに東西6m×南北1.5mの拡張区、SWU-PJ3号住の南側、B-C-8グリッドに東西6m×南北0.5mの拡張区を、それぞれ設定した(図2・写真2)。

SWU-PJ1号住は、昨年度の調査により、調査範囲のほぼ全域は調査完了していたが、今回拡張した結果、住居プランのほぼ全体を明らかにすることができた。また、東壁の周溝中から、口縁部と胸部を打ち欠いた埋甕が検出され、この住居址の構築時期が確定できたことは大きな収穫であった。

SWU-PJ2号住は、北側を拡張して調査したところ、これまで確認されていた面よりやや高い面から、大型の石圓炉が検出された。このことから、これまで調査してきた面は床面を掘りすぎていたことが判明した。この石圓炉をもつ住居プランに複雑に土坑等が重複していたものと思われる。石圓炉の内部を調査したところ、小形の深鉢形土器が出土し、この住居址の時期がほぼ判明した。

SWU-PJ3号住は、昨年度調査が半蔵のまま中途に終わっていた柱穴の全蔵を行い、石圓炉の調査、周溝等の調査を行い、プラン全体の調査を完了することができた。A-7グリッドの1号道状遺構の下面調査もあわせて行ったが、土坑等の落ち込みは確認されなかった。

期間中ほぼ天候に恵まれ、順調に調査を遂行することができ、8月13日に調査を終了した。 (山本輝久)



写真3 調査風景 2011.8.6

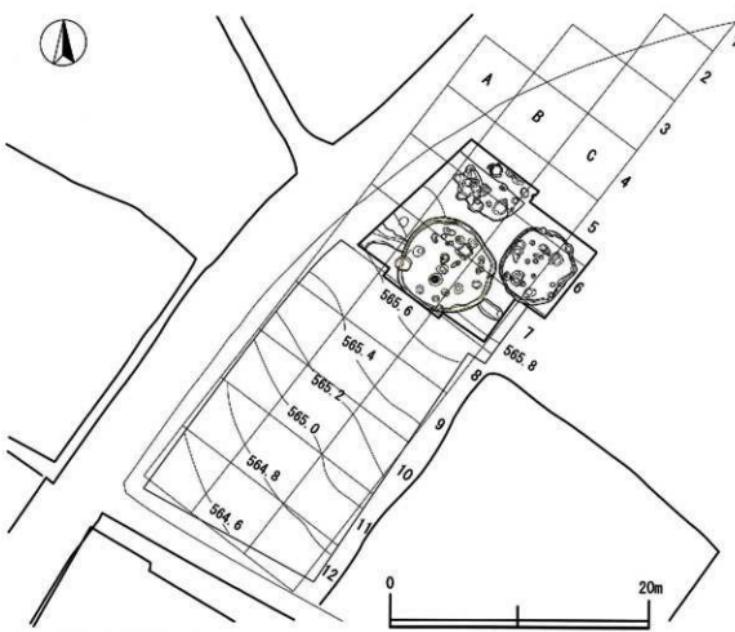


図2 調査地区全体図 1/400



写真4 調査風景 2011.8.13

4. 発見遺構と遺物

SWU-PJ 1号住(図3・4・10、写真5~10・16)

本住居址は、昨年度の調査で住居址の壁構を一部検出したことにより、調査対象範囲の調査を完了していた。しかし、今年度に入り、隣接地域が土地改良工事に伴う事前調査が実施されることとなり、調査区をさらに拡張し、住居址の全体のプランを明らかにすることが可能となった。

まず昨年度の調査区塁からC・5グリッドへ北に1.5m×7m、D-6グリッドへ東に1.5m×5mの範囲を拡張し、表土の掘り下げを行なった。2008年度の調査で設定した土層断面のポイントより東へ1.3m、30cm幅の土層観察用ベルト追加設定し土層観察を行なった。

調査の結果、住居址の壁、周溝を検出し、住居址全体のプランが明らかにすることが出来た。住居址の規模は長軸約7.1m×短軸5.3mの六角形状を呈する。住居址南側の壁際周溝にかかって、口縁部と洞下半部を打ち欠いた状態で埋設されていた埋甕が検出された(図5、写真8~10・16-1)。掘り込みは床面から約30cm下で疊層となるが、その底面に正位で状態で埋められていた。出入口部に埋設されたものと考えられる。

周溝は、埋甕の埋設部分を除き全周している。また今年度の調査で新たにP15を検出した。P15は長径40cm×短径37cm、深さ約70cmを測る。また、これまで、炉址の存在が不明であったが、昨年に調査を行なったP2・12から焼土が検出されていることから、これが地床炉ではないかと判断された(図4)。

住居内の調査、図面作成、全体写真を撮り終えた後、埋甕の掘り方を半截し土層断面図を作成後、埋甕の取り上げを行なった。埋甕は、残存部上端の径約30cm、現存高約22cmの大きさをもち、口縁部と洞下半部が打ち欠かれている。洞上半部がやや膨張する器形を呈し、文様は、頸部に横走する隆帯を貼附し、X状の隆帯を位置を変えて二段に貼り付けている。洞部は隆帯により縦位に漫巻き文を施し、内部は列点文を充填し、それ以外は無節Lの斜綱文が施されている。中期後葉・曾利I式期に相当しよう(写真16-1、図10-1)。

他に住居址の東南側から蛇紋岩製の小形磨製石斧が出土している(写真16-7)。大きさは長辺約5.7cm、幅3.5cmを測る。他に土器片のほかに黒曜石の剥片、打製石斧、磨石などが出土している。

第1次調査において覆土層に多量の礫石や丸石を伴う住居址が確認されて以来、調査を継続してきたが、本年度の調査において完掘するに至った。埋甕の出土によって住居址の時期が明らかとなり調査を終了することが出来たことは大きな成果といえよう。

(大野節子)



写真5 SWU-PJ 1号住調査風景



写真6 SWU-PJ 1号住 調量風景

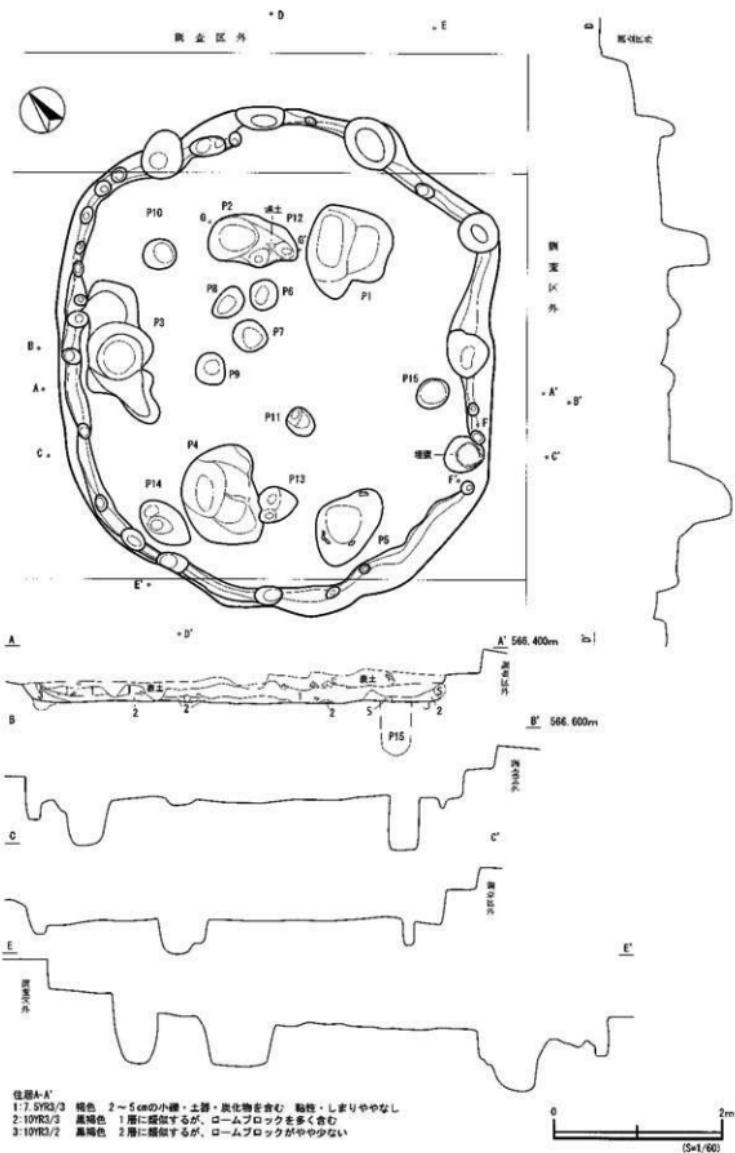


図3 SWU-PJ1号柱 平断面図(1/60)

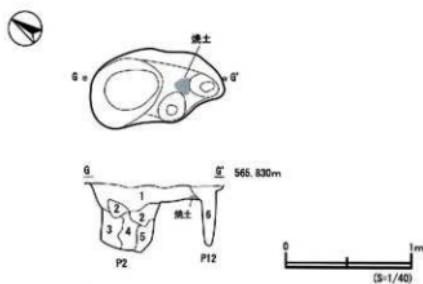


図4 SWU-PJ 1号住 炉址(P2+12) 平断面図(1/40)



写真7 SWU-PJ 1号住 西側から

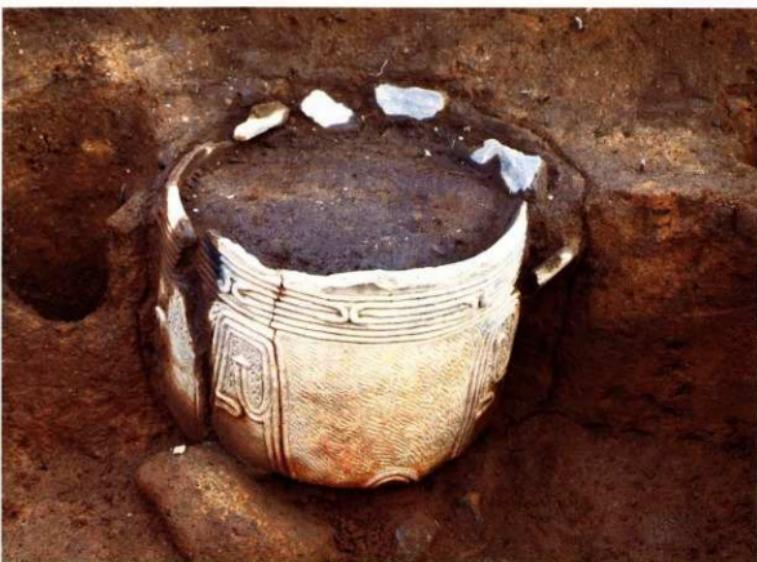


写真8 SWU-PJ 1号住 埋甕半截状態



写真9 埋甕振り方



写真10 埋甕半截断面

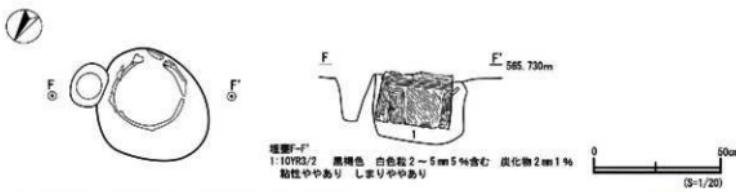


図5 SWU-PJ 1号住 埋甕 平断面図(1/20)

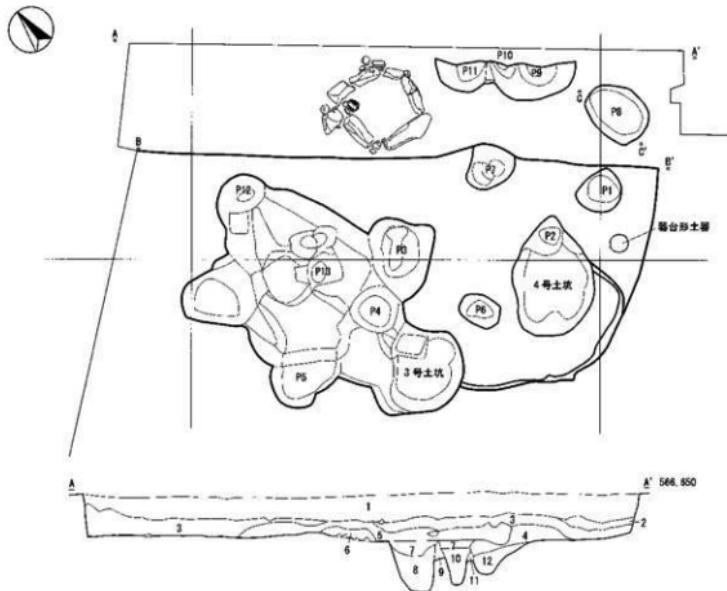
SWU-PJ2号住(図6・7・10、写真11・12・16)

本住居址は、昨年度の調査で終了していたが、今年度、土地改良工事に伴い調査可能範囲が広がったため、北側に1.5×7m拡張して調査を実施した。表土から50cmほど掘り下げたところで、一辺約65cmのほぼ正方形を呈した石圓炉が検出された(写真12)。これは、これまで確認されていた面より約20cm高い位置であった。このことから、これまで調査してきた面は床面を掘りすぎていたということが判明し、2008年度の調査で出土した器台形土器とその近くに置かれた卵形の石は、ほぼ床面上に相当する位置に置かれていたものと判断された。また、石圓炉の内部から、ほぼ完形の小形深鉢形土器が出土した(図10-2、写真12・16-2)。時期は、曾利II式期のものと思われる。石圓炉の底面には、段丘繰層が認められ、この面がほぼ炉の掘り方底面と考えられる。今年度は新たに、P7～P11を確認した。P7は今までの検出面で確認され、長径約70cm×短径約50cmの橢円形を呈し、最大深度は45cmほど、テラスを有するピットである。P8は拡張した住居の西側から検出し、長径約80cm×短径約50cmで、最大深度約15cmの横鉢形を呈する。P9～P11は調査区の範囲外に広がっているため、半分しか調査できなかつたが、これらのピットは3つ連なって検出された。P9は東西に約50cmで最大深度が約40cm、P10は東西約30cm、最大深度約50cm、P11は東西約40cm、最大深度約70cmである。P8以外は柱穴であると考えられ、過去の調査で検出されたピットを含めて位置関係をみてみると、P1、P2(昨年度の4号土坑の一部を新たにP2とした)、P4、P6、P7、P9、P10、P11、P12(昨年度の2号土坑をP12に変更)、P13が、本住居址の主柱穴であると考えられる。本住居址の所属時期は、石圓炉内の土器やこれまでの出土遺物から判断して、中期後葉曾利II式期と思われる。

今年度の調査の結果、現状では、東西約6m×南北約4mの範囲が調査することができた。北側の未調査範囲を含めると、ほぼ径6mほどの円形プランをもつ住居跡と考えられる。西側の複雑に重複したピットや土坑は、本住居址の下にある、別の遺構と考えられる。本調査区の北西部は疊が多く、ピット等の遺構は確認できていない。しかし、今回の調査で北側を拡張したことにより石圓炉が検出され、住居のほぼ全容を明らかにできたことは、大きな成果といえよう。

(鷹田夏実)

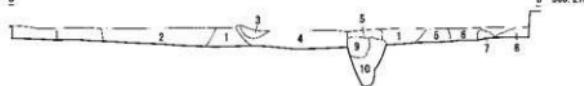




A-A'

1:表土・擾乱層	7:10YR3/3 蒼褐色 ロームブロック含む 粘性やなし しまりあり
2:10YR4/4 黄色 白色粘7%含む 粘性・しまりやあり	8:10YR2/3 黒褐色 漢化物含む 粘性あり しまりやあり
3:10YR3/4 増褐色 ローム含む 粘性やなし しまりあり	9:10YR2/3 黑褐色 粘性やなし しまりあり
4:10YR2/3 黒褐色 小白色粘3%含む 粘性やなし しまりあり	10:10YR2/3 黑褐色 白色粘含む 粘性あり しまりやなし
5:10YR3/4 増褐色 粘性・しまりあり	11:10YR2/4 増褐色 粘性・しまりあり
6:10YR2/3 黒褐色 黒色土含む 粘性・しまりあり	12:10YR4/4 黃色 粘性なし しまりあり

B



B-B'

1:2.5YR4/6 オリーブ褐色 白色粘3%含む 粘性・しまりなし	6:10YR3/4 増褐色 ローム含む 粘性やなし しまりあり
2:褐色	7:10YR2/3 黑褐色 白色粘5%含む 粘性やなし しまりあり
3:10YR4/4 黄色 粘性・しまりやなし	8:10YR2/4 増褐色 白色粘5%・ローム含む 粘性やなし しまりあり
4:10YR4/6 黄色 白色粘3%含む 粘性やなし しまりあり	9:10YR2/3 黑褐色 粘性あり しまりやあり
5:10YR3/4 増褐色 白色粘5%含む 粘性やなし しまりやあり	10:10YR4/6 黄色 粘性やあり しまりあり

C

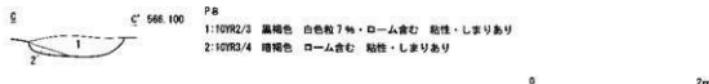


図7 SWU-PJ2分位 断面図(1/60)



写真11 SWU-PJ 2号住 南側から



写真12 SWU-PJ 2号住 石圓炉址

SWU-PJ3号住(図8・9、写真13~16)

本年度の調査は、昨年度に引き続き、SWU-PJ3号住のプラン全体を明らかにするため、住居内のピットの完掘、住居南側の壁の確認と周溝の検出を行った。また、本年度は住居址南側のプランを明らかにするために、南側へ 0.5×6 mの拡張区を設定し、壁の確認と床面の追求を行った。その結果、拡張した範囲内で住居の壁と周溝が検出されプラン全体が確認された。

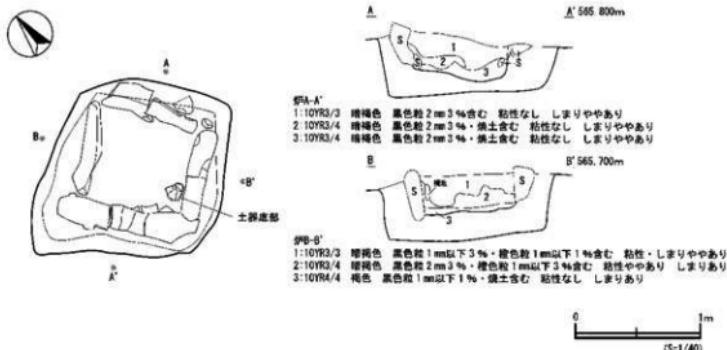
まず、3号住址の全体のプランを確認するため、まだ明確に検出されていない壁と周溝の調査を行ったところ、昨年度の調査で住居の北東側に検出されていた6号土坑の壁が住居址の壁であったことが判明した。それにより周溝の検出を行いながら壁を確認すると、住居の東側の横面は昨年度の壁面より50cm外のラインで確認することができた。その際、黒曜石製の石核(写真16-11)が住居址南東側の覆土中がら出土した。また新たなピットも検出され、このピットの東側からの周溝からは2木の打製石斧が出土した(写真13、16-5・6)。新たに検出されたピットはP16と命名し調査を行った。このピットとP15は完掘した結果、昨年度検出されたP1やP9と似た性質をもっており、住居址の土柱穴にあたるのではないかと思われる。

また、本年度は石窯炉の内部の調査を行った。炉内からは多数の土器片と上器底部が出土し、焼土が底面に広がるように検出された(写真15)。石窯炉内から出土した炭化物を採取して、(株)加速器分析研究所にて¹⁴C年代の測定を依頼中である。その測定結果については、来年度の概報で報告したい。

SWU-PJ3号住は、これまでの調査の結果、東西約7.8m×南北約7.5mの略円形のプランを呈し、住居内に石窯炉と底部穿孔倒置深鉢形土器をもつ大形の堅穴住居址であることが判明した。時期はこれまでに出土した遺物や、底部穿孔倒置土器から判断して、中期後業・曾利III式期に相当するものと思われる。

なお、底部穿孔倒置深鉢形土器を検出した4号土坑の北側に置かれた平石(鉄平石)の他属時期がこれまで問題となっていたが、今年度、この平石を除去したところ、下面にP2とした柱穴が確認されたため、住居址に伴うものではなく、住居址上面に確認されていた中世末～近世初頭の1分道路状遺構の下底面に伴うものであると最終的に判断するに至った。

(高野 舞)



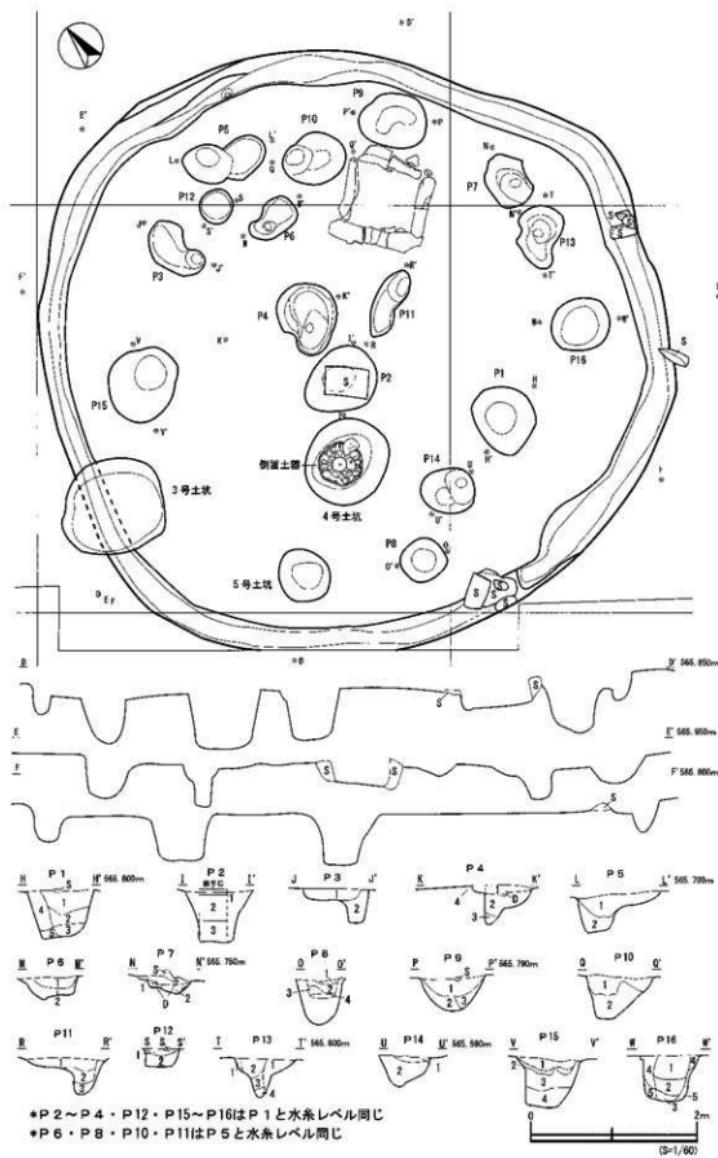


図9 SWU-PJ 3号柱 平断面図(1/60)

SWU-PJ3号住土層記述

P1	1:10YR3/4 暗褐色 粘性・しまりややあり 2:10YR4/4 黄色 粘性なし・しまりややあり 3:7.5YR4/4 暗褐色 1mm以下の褐色粒5%含む、粘性・しまりあり 4:10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性なし・しまりややあり 5:2.5YR3/4 暗褐色 粘性・しまりあり	P10 1:10YR3/4 暗褐色 粘性ややあり・しまりあり 2:10YR4/6 黄色 粘性なし・しまりあり 3:7.5YR4/3 暗褐色 粘性・しまりあり
P2	1:10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性・しまりなし 2:10YR4/6 黄色 粘性・しまりなし 3:10YR3/4 暗褐色 粘性強い・しまりややあり	P11 1:10YR4/6 黄色 粘性なし・しまりあり 2:10YR4/4 黄色 粘性なし・しまりあり 3:7.5YR3/4 暗褐色 粘性ややあり・しまりあり
P3	1:10YR3/3 暗褐色 1mm以下の16%褐色含む、粘性なし・しまりややあり 2:10YR4/4 黄色 粘性なし・しまりあり	P12 1:10YR3/4 暗褐色 1mm以下の褐色粒5%含む、粘性なし・しまりあり 2:10YR3/3 暗褐色 1mm以下の褐色粒5%含む、粘性ややあり・しまりあり
P4	1:10YR4/4 黄色 粘性なし・しまりややあり 2:10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性なし・しまりややあり 3:10YR3/4 暗褐色 1mm以下の褐色スコリア粒5%含む、粘性・しまりあり 4:7.5YR4/3 黄色 1mm以下の褐色粒3%含む、粘性・しまりなし	P13 1:7.5YR4/3 暗褐色 粘性ややあり・しまりあり 2:10YR3/3 暗褐色 1mmより粘性・しまりあり 3:10YR3/4 暗褐色 1mm以下の褐色粒3%含む、粘性・しまりあり 4:10YR4/4 黄色 1mm以下の褐色粒3%含む、 3層より粘性あり・しまりあり
P5	1:7.5YR3/3 黄色 1mm以下の褐色スコリア粒3%・褐色粒3%含む、 粘性・しまりあり 2:10YR4/3 にぶい黄褐色 1mm以下の褐色スコリア粒5%含む、 粘性ややあり・しまりあり	P14 1:10YR4/3 にぶい黄褐色 1mm以下の褐色スコリア含む、 粘性なし・しまりややあり 2:10YR4/6 黄色 粘性なし・しまりややあり
P6	1:10YR2/4 暗褐色 1mm以下の褐色粒5%含む、粘性ややあり・しまりあり 2:10YR4/6 黄色 1mm以下の褐色粒7%含む、粘性なし・しまりあり	P15 1:10YR4/4 黄色 1mm以下の褐色スコリア粒1%含む、 粘性なし・しまりあり 2:7.5YR4/4 黄色 1mm以下の褐色粒1%含む、粘性ややあり・しまりあり 3:10YR3/4 暗褐色 1mm以下の褐色粒3%含む、粘性ややあり・しまりあり 4:10YR4/3 にぶい黄褐色 2mm以下褐色粒1%含む、粘性・しまりあり
P7	1:7.5YR4/4 黄色 粘性なし・しまりややあり 2:7.5YR3/3 暗褐色 粘性ややあり・しまりあり	P16 1:10YR4/4 黄色 白色粒1mm以下7%・褐色粒1mm以下3%含む 粘性・しまりなし 2:10YR3/4 暗褐色 褐色粒1mm以下10%・褐色粒1mm以下2%含む 粘性なし・しまりあり 3:10YR3/3 暗褐色 褐色粒1mm以下10%・褐色粒1mm以下1%含む 粘性ややあり・しまりあり 4:7.5YR4/4 黄色 褐色粒1mm以下3%・白色粒1mm以下3%含む 粘性なし・しまりややあり 5:10YR4/3 にぶい黄褐色 褐色粒1mm以下3%・褐色粒1mm以下3%含む 粘性ややあり・しまりあり
P8	1: 7.5YR3/4 黄色 1mm以下の褐色スコリア粒5%・褐色粒3%含む、 粘性・しまりあり 2: 10YR2/4 黄色 粘性あり・しまりよりややあり 3: 7.5YR3/3 暗褐色 1mm以下の褐色粒3%含む、粘性・しまりあり 4: 10YR4/4 黄色 粘性あり・しまりよりややあり 5: 10YR2/4 暗褐色 粘性強い・しまりややなし	
P9	1: 7.5YR3/4 暗褐色 粘性なし・しまりあり 2: 7.5YR2/3 暗褐色 1mm以下の褐色粒1%含む、粘性ややあり・しまりあり 3: 7.5YR4/3 黄色 1mm以下の褐色粒3%含む、粘性なし・しまりあり	



写真13 SWU-PJ3号住 遺物出土状態



写真14 SWU-PJ 3号住 南側から



写真15 SWU-PJ 3号住 右圓炉址



写真16 出土遺物

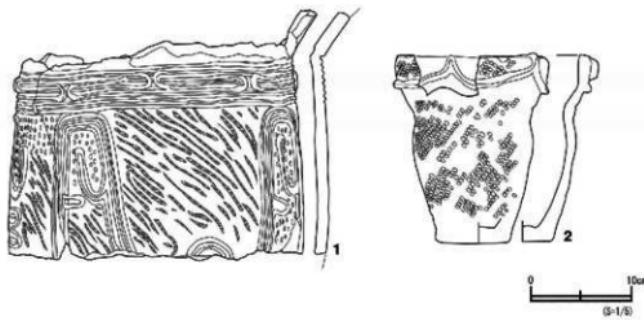


図10 出土遺物 1 : PJ - 1号住埋壺、2 : PJ - 2号住 石圓炉址内出土(1/5)

5. まとめ

2007年夏以来、毎年夏季休暇を利用して実施してきた諏訪原遺跡の発掘調査も、これまで対象としていた調査地区を含めて、広範囲にわたって土地改良事業が計画されたことにより、本年度の第5次調査をもって調査対象地区的調査は終了することとなった。発掘調査を開始した8月2日の時点では、すでに、これまで調査してきた調査対象地区的南半部も、北杜市教育委員会による事前調査が実施されていた。

本年の調査は、これまで検出してきた遺構の充掘を目指し、調査経緯でも触れたように、調査区を拡張して実施した。その結果、SWU-PJ1号住は、ほぼその全体のプランが確認された。これまで不明であった炉址は、P2・12に検出された焼土面が可能性の高いことが明らかとなつた。また、今回の調査で最大の成果は東壁の周溝中から埋甕が検出されたことである。この結果、本住居址の時期が曾利I式段階に相当することが明らかとなった。また、SWU-PJ2号住は北側に1.5m幅で拡張したところ、大形の石囲炉が検出された。これまで調査していた面よりやや高く検出されており、本来的には、この面が2号住の床面であったものと思われる。この住居址は、これまでの調査から、器台形土器の検出や不整形の土坑や井戸尻式期の土器を出土する土坑が複数に重複していることが判明していたが、今回検出された石囲炉内部から出土した小形深鉢形土器から、曾利II式段階の住居址と判断された。住居址北側部分は北杜市教育委員会の調査のための駐車場への通路部分に相当したため、プラン全体を確認するに至らなかった。SWU-PJ3号住は検出された柱穴の覆土全載と石囲炉の内部調査ならびに、周溝の調査を行い、プラン全体の発掘調査を完了することができた。2008年度に検出された底部穿孔倒置深鉢形土器から、曾利III式期の住居址と考えられる。

このように、本年度の調査により、これまで確認されてきた遺構の調査をほぼ終了することができた。5次にわたる調査により大きな成果をあげることができたのも、北杜市教育委員会の暖かいご指導・ご協力があったからであり、あつく感謝する次第である。また、長きにわたる発掘調査に対して快くご承諾いただいた、土地所有者の方田勝海氏にも、この場を借りてあつく御礼を申し上げたい。来年度は、これまでの調査区の道路を挟んだ西側隣接地を対象として調査を実施する予定である。この対象地区は、北杜市教育委員会(合併前の明野村教育委員会)により確認調査が実施され、重複する住居址群等が確認されており、来年度の調査成果が大いに期待されよう。今後とも調査を継続してゆきたい。

(山本耀久)



写真17 調査風景 西側から



写真18 SWU-PJ 3号住 石囲炉調査風景

調査参加者名簿

教 員 山本輝久(大学院生活機構研究科教授)・小泉玲子(人間文化学部歴史文化学科准教授)

助 手 石井寛子(人間文化学部歴史文化学科)

大学院生活機構研究科修士課程修了生 大野節子(世田谷区教育委員会調査員)

石川真理子(松本市教育委員会)

大学院生活機構研究科修士課程 2年 鎌田夏実・高野 舞、1年 井口真理子・飯島 萌

人間文化学部歴史文化学科 学生

4年 市村有紀子・斎藤珠緒・佐藤 薫・佐藤未幸・小林寛子

3年 酒井貴美子・間根 藍・會田成美・清水志保・中村美結紀

2年 右下翔子・岡田真実・片桐里麻・鈴木英里香・田中文子・高田夏帆・野崎 恵・前田有美

渡辺瑞季

1年 酒井美妃・鈴木 花・福島唯奈・芹沢優妃・堀端真帆



写真19 前半参加者記念写真



写真20 後半参加者記念写真

諏訪原遺跡関連文献

佐野 隆 1996 「発掘調査速報 諏訪原遺跡」『年報-平成7年度-』 北巨摩郡市町村文化財担当者会

佐野 隆 2003 「発掘調査速報 諏訪原遺跡」『八ヶ岳考古-平成14年度年報-』 北巨摩郡市町村文化財担当者会

佐野 隆 2004 「発掘調査速報 諏訪原遺跡」『八ヶ岳考古-平成15年度年報-』 北巨摩郡市町村文化財担当者会

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科 編 2007 『山梨県北杜市明野町上神取 諏訪原遺跡発掘調査概報 2007年度』

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科 編 2008 『山梨県北杜市明野町上神取 諏訪原遺跡発掘調査概報 2008年度』

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科 編 2009 『山梨県北杜市明野町上神取 諏訪原遺跡発掘調査概報 2009年度』

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科 編 2010 『山梨県北杜市明野町上神取 諏訪原遺跡発掘調査概報 2010年度』

報告書抄録

ふりがな 書名	やまなしけんほくとしあけのよちかみかんどり すわはらいせきはつくつちょうさがいほう 山梨県北杜市明野町上神取 調訪原遺跡発掘調査概報 2011年度					
著者名 卷次						
シリーズ名						
編集者名	山本瑞久・小泉玲子・大野節子・鷲田夏実・高野 錦・井口真理子・飯島 菜					
編集機関	昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科					
所在地	〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7 昭和女子大学 TEL: 03-3411-5373					
発行年月日	西暦 2011年12月15日					
ふりがな 所取遺跡 所在地	ふりがな 市町村 遺跡番号	コード 01-014	北緯 35度 45分 2秒	東経 138度 26分 37秒	調査期間 2011.08.02 ~2011.08.13	調査面積 約150m ²
すわはらいせ き 調訪原遺跡 のまちかみか んどり 155 8-1	やまなしけん ほくとしあけ のまちかみか んどり 155 8-1					縄文時代環状集落形成 成～崩壊過程の研究に かかる学術調査
所取遺跡名	種別	土な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
調訪原遺跡	無落址	縄文時代	堅穴住居址3・中庭道 状遺構2	縄文土器・土製品 石器	縄文時代中期の大規模環状集落址 で、2007年度より、昭和女子大学人 間文化学部考古文化学科が調査主体 となって、中期環状集落形成～崩壊 に至る過程解明のため、学術発掘調 査を継続してきた。本年度は、縄文 時代中期の堅穴住居址3軒の继续調 査等を実施し、ほぼ調査を完了する ことができた。本年度の調査をもって、これまで継続してきた対象調査 地区の調査は終了することとなった。	



SWU-PJ 1~3号住居址

山梨県北杜市明野町上神取
諏訪原遺跡発掘調査概報
2011年度

発行日 2011年12月15日

発行者 昭和女子大学人間文化学部
歴史文化学科

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7

TEL 03-3411-5373

FAX 03-3411-7059

印刷 野崎印刷紙器株式会社